

フランシス・E・W・ハーパーの 『アイオラ・リロイ』とプラグマティズム

藤 野 功 一

I. 『アイオラ・リロイ』とプラグマティズム

1980年代にはじまるフランシス・エレン・ワトキンス・ハーパー (Frances Ellen Watkins Harper, 1825-1911) の『アイオラ・リロイ、または、取り払われた影』 (*Iola Leroy: or Shadows Uplifted*, 1892) の再評価は主にフェミニズムの観点から行われており、最近ではコリーン・T・フィールド (Corinne T. Field) の論文「フランシス・E・W・ハーパーと知的成熟の政治学」 (“Frances E.W. Harper and the Politics of Intellectual Maturity”) が示すように、この小説をアメリカ黒人女性の知的精神史につらなるものとして評価する傾向が高まっているが、ここではハーパーの小説のアメリカの知的系譜への貢献をさらにはっきりさせるために、『アイオラ・リロイ』を、アメリカ独自の哲学であるプラグマティズムの系譜に連なる作品として読んでみたい。2004年の論文「19世紀後半から公民権運動の黎明期までの黒人女性歴史家たち」 (“Black Women Historians from the Late 19th Century to the Dawning of the Civil Rights Movement.”) で、ペロ・ガグロ・ダグボヴィー (Pero Gaglo Dagbovie) は、ハーパーが「奴隷制時代と彼女の生きている時代を、^{プラグマティック} 実際的かつ政治的な目的のために関連づけた」¹ と論じて、ハーパーが現実への効果を重視する女性知識人の一人であることを示唆していたが、その後、彼女の小説『アイオラ・リロイ』を、プラグマティズムの系譜のなかに位置づけようとした論文は、ほとんど現れなかった。しかし南北戦争以前からすでにアフリカ系アメリカ人女性として奴隷廃止を積極的に論じ、ジャーナリスト、詩人、禁酒活動家として活躍

してきた実践的活動家のハーパーが書いた小説は、人間の行動をその社会変革の意思とともに評価するプラグマティズムの立場から読み解くことによって、よりその意図が明確になるだろう。『アイオラ・リロイ』における女性主人公のまじめに社会改革を求める態度を、アメリカのプラグマティズムの系譜につらなるものとして論じることによって、この作品の文学的評価を定めることにしたい。

II. プラグマティズムの系譜

コーネル・ウェスト (Cornel West) は、その著『哲学を回避するアメリカ知識人—プラグマティズムの系譜』(*The American Evasion of Philosophy: A Genealogy of Pragmatism*, 1989) のなかで、ラルフ・ウォルド・エマソン (Ralph Waldo Emerson) を、アメリカ独自の哲学であるプラグマティズムの創始者として改めて位置づけた。この著の中でウェストはエマソンを「根っからのロマン派的思想家であり、現実の中に理想を実現したり、実際的なことの中に原則を現実化することに大まじめに取り組む——つまり、思想と行動、理論と実践の間の、切っても切れない何らかのつながりを重視する」人物であると記述している²が、このように、「思想と行動、理論と実践のあいだの、切ってもきれいなんらかの繋がりを重視する」のがプラグマティズムの本質をなす考え方としてよいだろう。20世紀初頭を代表するプラグマティスト、ウィリアム・ジェームズ (William James) も、その著『プラグマティズム』(*Pragmatism*, 1907) のなかで、「プラグマティズムの手法は・・・あらゆる概念をその実際の効果に従って判断する」(*The pragmatic method ... is to try to interpret each notion by tracing its respective practical consequences.*)³と論じている。それまでのデカルト以来のヨーロッパ哲学が、認識論、すなわち、世界を正しく認識するにはどうすればよいか、という問いを重視するものであったのに対して、しばしば「実用主義」と訳されるプラグマティズムは、哲学の認識論的な問いを回避して、それぞれの人間の理想、思想が、どのように現実の社会の中で実現されるか、どう役立つのか、という問いを重視する思想であった。⁴

1980年以降、アメリカを代表するプラグマティストであったリチャード・

ローティアー (Richard Rorty) もこの点を強調している。ローティアーは「プラグマティズムとは何か」(“What Is Pragmatism?”) というタイトルのもとに行われた対談の冒頭で、プラグマティズムとは何かと問われて、「現実と認識との一致 (correspondence) など気にせず、むしろ自己存在の弁明 (justification) と自己証明の可能性、そして他者との交流における自由をまず考えることだ。そうすれば現実と認識との一致などを気にする必要はなくなるのだから」と説き、そしてこの「自己の弁明」とは、「自分の信念に対して不服を唱える人々へきちんと答えることだ (Just answering objections to the belief you hold)」と論じた。⁵ このような発想は、おのずから人間の行動を、世界を変えるための戦略的、そして政治的なものとして評価する方向へと向かわせるだろうから、ローティアーの思想の影響を大きく受けた現代のプラグマティストの一人、コーネル・ウェストが、ローティアーの登場によって改めて活性化された思想の動向をネオプラグマティズムと名付け、「洗練されたネオプラグマティズムの目標は、利用可能な最適の社会理論や文化批評や歴史記述の見識に照らし合わせて具体的実践について系譜学的に思考し、効果的な戦略と戦術に照らし合わせて特定の道徳的帰結を達成するために政治的に行動することである」⁶ と論じたのも、必然的な帰結だといえるだろう。

現代のプラグマティズムは、人間の認識がどうあるべきかではなく、人間の行動がどれだけ戦略的、政治的に効果があるか、を重視する。こうして、社会改革を求める知識人をプラグマティズムの系譜につらなる人々と考えるコーネル・ウェストは、W・E・B・デュボイス (W. E. B. Du Bois) や、エドワード・W・サイド (Edward W. Said) といった知識人も、プラグマティズムの系譜に連なる知識人としてとらえている。そして現在、人間の行動を、何らかの目標を実現しようとする力であるエージェンシーとしてとらえ、その戦略的的確さと政治的な効果を重視しながら評価しようとするプラグマティックな研究は、現在のアメリカの文学研究の中でも主要な潮流の一つとなっているだろう。

しかし一方で、エマソン流の理想主義をその源流に持つプラグマティズムは、しばしば現実には有効な改革をなすことができない、白人の帝国主義的な支配を肯定する保守的な思考に陥りがちなのも事実である。コーネル・ウェストはエ

マソンが教養ある白人のミドルクラスの集団に対して受け入れやすい哲学を提供し、結局はアメリカの社会において依然としてその中核を占める「アングロ・サクソン人による非ヨーロッパ系の国々や国民に対する帝国主義的な支配の擁護論として容易に役立つ」論理を提供しかねない点を批判し、⁷また、サイドもその著作『知識人とは何か』のなかで、知識人が特定の社会階層に有利な主張を行わないためには、「知識人が、諸民族と諸個人との差異を十分考慮に入れつつ、そのような差異に、何かを優先させるような隠れた階層関係や偏向性や価値判断などをこっそり持ち込んだり」しないようにしなければならない、と強調している⁸が、彼らの批判や警告自体、エマソンからジェイムズ、ローティをへて、サイド、そしてコーネル・ウェストに至る知識人の政治的で戦略的な議論が、ややもするとその時代時代のアメリカ社会の中核を実質的に担っている社会階層にとって都合な自己満足をあたえてしまうという陥穽にはまりがちであることを示唆しているだろう。この落とし穴に陥ってしまうと、T・S・エリオット (T. S. Eliot) が1928年にすでに皮肉を込めて言ったように、プラグマティズムは多数派、あるいは時流に迎合してしまうという「大きな弱点を露呈して、結局誰の役にも立たずに終わってしまう」⁹ことになってしまいかねない。

プラグマティズムが、つねに社会の変化を求める議論として有効であるためにも、この論文では、あらためてフランシス・ハーパーの小説『アイオラ・リロイ』を、プラグマティズムの系譜に連なるひとりの知識人によって書かれた小説でありながら、なおかつプラグマティズムの論理が持つ落とし穴を回避することのできる視点を持った作品として、再評価してみたい。

III. プラグマティズムの立場から読む『アイオラ・リロイ』

19世紀後半を代表する黒人女性知識人の一人であり、その生涯を黒人解放運動と黒人女性の地位向上にささげたハーパーは、1860年の彼女の手紙の、「言葉だけで同情を表現しても始まらない。それを行動に結実させなければならない」(It is not enough to express our sympathy by words; we should be ready to crystalize it into actions.)¹⁰ という一節を見ても分かるように、まさに言葉

によって理想を掲げ、それを実践に結びつけようとしたプラグマティストの一人であった。

ハーバーの実践的、政治的な主張の大きな特徴は、彼女の言葉のなかではしばしば、自己の存在がおびやかされる危機感から発する社会変革への意思が強調されている点である。自己を含めた黒人の存在が社会からおびやかされている、そしてそこから黒人は救われなければならない、という彼女の主張は、黒人女性講演者としてのハーバーの講演でも表明され、¹¹そしてまた彼女が若い頃から得意とした詩作品にもしばしば象徴的に表現されている¹²が、ハーバーの晩年の唯一の長編小説『アイオラ・リロイ』にも、その感覚は顕著に現れている。この、自己存在がおびやかされているという危機感に支えられた真剣な社会改革への意思こそ、ハーバーが『アイオラ・リロイ』によってはっきりと表明したテーマであろう。

この小説では、南北戦争以前の裕福な南部の白人農園主の娘として生まれ、北部で高い教育を受けたアイオラ・リロイが、父親の死をきっかけに自分の母親がもともと黒人の血を引く奴隷出身であったことを知らされて奴隷の身分に落とされてしまう。その後、南北戦争勃発後に、アイオラは奴隷の身分を逃れて野戦病院で北軍の看護師として働き、再び自己を社会的に向上させてゆくが、自らが経験した運命の変転から受けた心の傷を忘れることはない。そして彼女は、ついにはその白人と全くかわらない外見にもかかわらず、自己のアイデンティティーは白人ではなく黒人であると決断する。アイオラは、白人のグレシャム医師から白人の良家の妻となるよう求婚されるが、その求婚を断り、自分と同じように外見は白人でありながら黒人の祖先を持つことを誇りとするラティマー医師と結婚し、自分たちの所属する黒人共同体の知的指導者となってゆく。

この小説のプロットでは、アイオラが黒人として生きてゆこうと決意するまでの過程に、二人の医師、白人のグレシャム医師と、アイオラと同じように外見は白人だが黒人の血を引いているラティマー医師という二人の男性から求婚されるというプロットが絡められ、一種のロマンスの体裁をとっている。だが、この小説の中では、アイオラとその求婚者との間には、恋人同士にいくぶんかでもみられるはずの、官能的な喜びを暗示する描写はほとんど表現されない。

むしろ、この小説の後半を読んで強く印象づけられるのは、女性主人公が恋愛と対峙したときの、きわめてまじめな態度である。たとえば小説の後半の部分では、のちにアイオラと結婚することになるラティマー医師の求婚が描かれるが、アイオラはその求婚について、ラティマーを上回る真剣な態度で検討しようとする。自分の求婚に対してアイオラがまったく甘い気持ちになってくれないので、さすがのラティマーも会話の途中で不満を示すほどだ。だが、この場面で示されるアイオラの未来に対する不安は、ラティマーとの結婚に何らかの甘い幻想を抱けないほどに強い。現実の世界において黒人の受けている暴力的な圧政を取り除かなければ主人公の苦悩が解消されることがないことを示そうとして、ハーバーはこの場面を次のように描き出す。

アイオラ、僕は真剣なんだ。とラティマーは情熱的に言った。

「僕が今この生涯を捧げている医師という仕事も、君という伴侶がいてその行く末を照らし、そして祝福してくれるなら、その重荷も軽くなり、僕の進む道もそれほど険しくはないと思えてくるんだよ。」

アイオラの顔は急にまじめになった。目を下に落とすと、彼女は言った「少し考えさせてください」

彼ら二人は黙りこんで川辺を進んでいく。とうとうラティマー医師が沈黙を破ってこう言った。

「ミス・アイオラ。君はいまの黒人がおかれている状況をひどく悲観的に考えてやしないかい。」

「そうかもしれません。」とアイオラは答えた。「でも私の心が平穏であるためには南部で白人が黒人をリンチで火あぶりにしていないことが必要なんです。」

「ちょっと心配になるんだが」とラティマー医師は言った「きみはこのままだと気鬱で、神経過敏になってしまうよ。たいていの人間はもっと人生を気楽に考えているものだ——どうしてそうできないんだい？」

「だって、世間を気楽に見ている人には見ることはできないでしょうけれど、これから先にも、この世界を踏みにじろうとする人々が必ず現れるっ

てことが私にはわかっているのですもの」¹³

この場面にはうら若い女性が恋する男性に求婚された際の甘い雰囲気はほとんどない。むしろここでは、自分も憎からず思っている男性からの求婚を受けても、冷静に、黒人と白人の間の平等な関係の実現という理想を追求しようし、さらにそれを実現する過程で自分の生きる世界をおびやかすことになる白人社会にたいして、神経質なまでに考えを巡らせている、未来に対する不安と苛立ちにとらわれている黒人女性の心理が強調されている。

恋人たちの甘い雰囲気とはかけ離れたこの恋愛の場面には、1980年代にいち早くこの小説を再評価したヘイゼル・V・カービー (Hazel V. Carby) も、不満に思ったらしく、ロマンティックな道具立てにもかかわらず、この小説には、性的な欲望や血脈の通った愛情の表現がほとんどないと論じ、さらにはこの小説の限界として、ハーバーがヒロインのアイオラの性的な欲望を表現することを抑圧してしまっている¹⁴と指摘している。たしかにこの小説におけるアイオラのみじめさと理想主義には現代の読者を少々辟易させるところがあるため、カービーの不満ももっともだが、ただ、ここでカービーが見逃しているのは、そのような性的な欲望の抑圧は、アイオラが彼女の生きる社会では将来にわたって自己の存在がつねにおびやかされる危機にあるという可能性をひしひしと感じているためだ、という点であろう。アイオラはセクシュアリティよりももっと切実に自己を支えてくれる言葉と、それを分かってくれる相手を必要としているのだ。

ローティーは、自分の持つ信念や自分の存在のあり方そのものの壊れやすさをつねに意識している人間を、アイロニスト——すなわち、自分のあり方をつねに疑う人——と呼んでいるが、アイオラもまた、現在の自己のあり方を疑う、ローティーの言うアイロニストの一人とっていいだろう。そしてさらにローティーの言葉を借りてよいなら、現在の自分のあり方を疑うアイロニストは、ここにはない新たな言葉、新たな社会制度、新たな人間関係を見つけるために「他の人々に語りかけることを必死に求めており、その必要は、人々が性的な交わりにいただく必要と同じくらい切実なもの」¹⁵と感じてさえいる。アイオラのお

かれた状態も、まさにそのような状態に他ならない。

アイオラは神経質なまでに将来への不安を感じているが、その理由は、彼女の感覚が、油断していれば世界は自己の存在そのものを破壊しようとするだろうという危機感に支えられているためである。結婚に際しても、アイオラは自己の感じている存在の危機感を共有できる男性との結婚を望んでいる。そのため、ラティマー医師がこの世界への危機感を共有できるパートナーとして彼女に求婚して「僕と運命を共にしてほしいと頼むとは言っても、君に安逸で贅沢な暮らしをさせてあげられるというわけじゃないんだ。これからは来る年も来る年も、僕は悪意ある人々からの攻撃から自分の家を守るのに精一杯だろう。けれども君が僕の家を君さえてくれれば、僕の家は明るく、天国にもおとらぬほどすばらしい場所になるはずだ」¹⁶と言った時に、はじめて彼女はその求婚を承諾する。『アイオラ・リロイ』という、形式的にはロマンスの体裁をもったこの小説において実際に描かれているのは、自己の存在に不安を抱く主人公が、その不安を共有することのできるパートナーをみつけ、さらには同じような危機感を抱く人々によって構成された黒人の共同体に所属することを自覚的に選び取り、彼らとの対話の中で自分の居場所を徐々に作り上げてゆく、知的な個人の成長過程なのである。

ただ、アイオラが自分の存在の不安を共有できる人々を得られたからといって、彼女の未来への展望がはっきりとするわけではない。彼女には新しく来るべき社会制度の正確な見取り図や、それを明確に語るための言語があるわけではないのだ。アイオラは、黒人の共同体の中で指導者的な立場となりながらも、おのずと、ローティーの言う「自分がうまくやろうとすることを表す言語を開発する前に、そもそも自分のやりたいと思っていることが正確には何なのか、はっきりさせることができない」¹⁷知識人の一人にならざるを得ない。彼女はただあやふやに、白人の社会と比べて自分たち黒人の作り出す社会のほうがよいであろう、という予測を述べてみたり、¹⁸あるいは啓蒙思想の枠組みに依拠しながら、黒人の母親に対する教育が黒人共同体の全体の向上に寄与すると論じる¹⁹にとどまっている。

しかし、主人公の限界が、作者の視野の限界を表すわけではない。ここで評

価すべきなのは、ハーバーの小説では、未来の理想的な社会の青写真が描かれないとしても、アイオラの危機感に満ちた態度と言葉が、白人男性医師のグレシャム医師の存在のあり方とその言葉に対比されることで、アメリカの中核を担う白人男性の価値観そのものに有効な批判を加えることができる視点が提供されている、という点だろう。

この小説には、アイオラに求婚し、結局はふられてしまう白人の中年男性、グレシャム医師が出てくる。この白人医師とアイオラとの対比によって、この小説はアメリカの社会の中核に属する白人男性の存在のあり方にはどのような限界があり、さらにはこの白人男性が、人間の生命力を根こそぎ奪ってゆく社会の構造にどれほど無自覚に巻き込まれているのかが描かれている。次章では、グレシャム医師とアイオラの対比に焦点をあて、ハーバーの小説が白人社会とそこに属する人物をどう批判的に描写しているかをみてみよう。

IV. グレシャム医師とアイオラ

自分の白人としての地位の優位性に何ら疑問を抱かずに生きるグレシャムに対して、いっぽうのアイオラはすでにグレシャム医師と会う前に、裕福な白人の娘という立場から一転して奴隷の立場におかれるという運命の変転を経験している。この二人を対比して描くことによって、この小説では、グレシャム医師とアイオラは、単純に白人と黒人というカテゴリーではなく、あらゆる人々の存在を視野に入れた二つのカテゴリーの、それぞれを代表する人物として、この二人を描写しているように読める。ここでは、ハーバーがどのようにアイオラとグレシャム医師の二人を対比して描いているかをみてみよう。

この小説の前半で、南北戦争の野戦病院で働く美しいアイオラに一目惚れしたグレシャム医師は、さっそく彼女に求愛し、断られるが、この求婚の場面ですでに彼は白人としての社会的地位とその存在のありかたに全く疑問を抱かない人物として描かれている。彼はアイオラに、自分との結婚によって彼女の労苦を軽くしてやりたいと提案する²⁰が、グレシャムは、自らが所属する白人社会が社会的に有利な立場に立っていることに疑問を持っておらず、その提案自体が傲慢なものであることに気づいていない。自分の白人としての自己同一性

に何ら疑問を抱かずに生きるグレシャムに対して、アイオラはすでにグレシャム医師と出会う前に、裕福な白人の娘という立場から一転して奴隷の立場におかれるという運命の変転を経験している。この自己の立場の急激な変化の可能性を知ることによって、アイオラは、自分自身の属する社会を客観的にとらえ、それによって自分なりの考え方と自分自身の使命を自覚するようになっている。アイオラにとっては、そのように変化してきた自分自身それ自体が、驚きでもある。²¹

みずからの運命の変転そのものを、自己の根底に据えているアイオラとは対照的に、グレシャム医師は裕福な家庭の出身であり、彼の親族は典型的なアメリカの中産階級、ブルジョア的な価値観を体現している家庭の出身である。彼はその社会の中に浸りきっていて、アイオラに求婚する時も、アイオラに黒人の血が流れていることを隠して妻にしようとし、自分の属する家族の価値観を変えようとはしない。そのため、アイオラに、自分たちの子供に黒人の肌の色が間違いようもなく現れた時にどうするのか、と聞かれた時に、彼は答えられずに戸惑うままだ。²² 彼は自分を良心的な白人であると考えてはいるが、その彼の発想の中には、白人の社会と自らの存在のあり方を根本的に変えてゆこうという発想は見られない。アイオラの質問はグレシャムの世界観の根本にある自己満足と現状維持に安住する発想を鋭くつき、きっぱりとグレシャムの求婚を断ることになる。

この小説では、アイオラに結婚を断られた後も、グレシャム医師はアイオラの自己の捉え方とは対照的な発想で生きている人物として、引き続き小説の中に登場する。アイオラに結婚を断られて後、グレシャム医師とアイオラはしばらくの間はなればなれになるが、南北戦争後にまた再会する。そのとき、グレシャムは過酷な医師の仕事のためにすっかり疲弊している。そしてこの再会の場面で初めて明らかになることだが、グレシャム医師には片腕がない。南北戦争が始まって早い時期に、銃で誤って撃たれたせいだ。そして読者は、彼が失われた片腕を見るたびに、これから一生涯、戦争の記憶の一つとしてこれを見るのだなと常々考えているということを知る²³ ののだが、むしろこの部分を読む読者にとって衝撃的であるのは、グレシャム医師自身が、自己の肉体の一部を

失い、その後も自己の生命力を消耗する労働を重ねながら、しかし、文字通り自分の生命そのものをもおびやかしかねない社会の構造自体には全く疑問を抱いてこなかったという点だろう。

グレシャムは、アメリカが白人を含むあらゆる国民の存在や生命の根幹をおびやかす構造を持つ国家を作ってきたという事実に気付かず、社会変革への意志を持つことができない白人の典型的な存在として描き出される。ハーバーの『アイオラ・リロイ』を評価し直すことは、このような、アメリカの帝国主義的な欲望を内面化した主体として生きる白人男性の意識の死角を効果的に批判する視点をこの小説がもっている点を評価するということでもあるだろう。自分の属する社会の構造を疑うことができないグレシャムの鈍感さとは対照的に、アイオラの存在の根底には、現状の世界における自己存在の危機感を感じ取る感性がある。彼女にとっての成熟とは、その危険感に突き動かされるように自己を変革してゆき、自分にさえ驚きである新しい自分に出会うことである。

エドワード・W・サイド (Edward W. Said) は、その著『始まりの現象——概念と意図』(*Beginnings: Intention and Method*) において、世界を刷新するということは、主体性を更新することにはかならないと指摘して、「始まりとは、なににもまして更新可能な主体という意味である」(“beginning” is an eminently renewable subject)²⁴と述べているが、『アイオラ・リロイ』においては、この更新可能な主体の自覚がアイオラの言語表現の中に示唆され、そして自分が所属する社会について根本的な危機感を抱かず、自己を更新可能な存在とは捉えることのできないグレシャム医師は、必然的にアイオラの結婚相手から脱落してゆく。

その後、アイオラが南北戦争後の南部で黒人共同体の指導者としての地歩を築いている数年の間に、アイオラと別れたグレシャムは、マラリアに罹患し、精神的にも衰弱してしまう。そして彼はようやく病の床から回復すると、彼はアイオラに会えることを願いながら、アイオラの住む町で行われる医学会に参加する。そこで再びグレシャムは願い通りにアイオラを出会うのだが、彼の健康と外見は、南北戦争以降の経験によってさらに蝕まれていることが読者にははっきりと示される。しかし、グレシャム自身は自分の存在が世界によって蝕

まれていると自覚していない。むしろ彼はアイオラが以前よりも若々しく、女性として成熟している様子を目にして、アイオラに結婚を断られたときの失望を思い出しながらも、自分がとうの昔に失っていた希望が再び心の中に目覚めたかのような感覚を味わう。そのグreshamの様子は、次のように描写される。

グresham医師の様子からは時の経過とともに健康が損なわれているようすがはっきりと見て取れた。彼の足取りは重く、彼の頬はわずかにこけて、彼の仕草は病院でアイオラと別れた頃よりも幾分か重苦しいものになっていた。けれども、アイオラと会ったことで、彼の心は思いもよらないほどの喜びに震えたのだった。彼女の手に触れ、彼女の声の響きを聞くと、長いこと眠っていた希望と情感がわき上がり、そしてグresham医師は自分がむかし経験した悲しい記憶と落胆を思い出しながら、過去へと立ち返るかのように感じるのだった。²⁵

グresham医師はいまだにアイオラへの思いを断ち切ることができてはいないが、それはあくまで、自らの存在様式を変更することもなく、ただ昔の若い頃の自分に立ち返り、再びアイオラを自分の伴侶とする願いでしかない。それが叶わぬ願望であることを知るだけの知性を持っていながら、彼はただ彼のままで、アイオラを所有することのできない悲しみと落胆を再び味わう。そして彼のフェティッシュな欲望によって眺められたアイオラは、その身体が美しく光り輝き、知性にも恵まれた存在として記述され、「アイオラは、成熟して女盛りを迎え、知性に恵まれ、落ち着いた愛らしさと美しさに輝きながらグreshamの目の前に立っており、彼女の声には悲しみの影さえない」²⁶と記述される。その後も依然としてアイオラを妻にしたいという欲望を捨てきれないグreshamは、アイオラと出会い、黒人の世界観が白人とまったく違うということを聞かされた後でも、人種問題を論じる際に、黒人種が白人種に完全に吸収されてしまうことが唯一の解決策だ²⁷と論じ、白人中心の世界の構造を根本的に変更することのない解決の仕方を提案するのである。この小説では、自己の存在の仕方に一貫して疑問を抱かないグreshamの存在と対比されることによって、ア

アイオラの世界観が白人のそれとは全く違うことが強調される。

この小説の結末近くでは、アイオラは、自己が更新可能であることを自覚することから一歩進んで、主体というものが言語の網の目によって出来上がっており、その言語の網の目を再編成することによって、例えば白人と黒人の境界線、あるいは男性と女性の境界線を乗り越えることができることを自覚することが描かれる。この小説の結末近くで、アイオラは夫となるラティマー医師に、「もし自分が小説を書くなら、私の小説の主人公はあなたですわ」(“Well, Doctor, when I write a book I shall take you for the hero of my story.”)と言い、それに対してラティマーは、一体ぼくの行為のどんなところをつかまえて、君のペンで描き出そうって言うんだい、と応じる。²⁸ もちろんアイオラは、自分の経験と重ねあわせながら、外見が全く白人のラティマーが、白人として生きてゆく可能性を捨て去って黒人として生きることを選び取ったドラマティックな変転を小説にしたいと考えているのだが、むしろこの会話で注目すべきは、アイオラが小説を書くという行為によって表明しているのが、彼女自身の言葉によってある主体を言語の網の目によって編み上げることができ、その表現によって、自分もまた社会的表象の網の目の中で力を振るう存在となることができると考えはじめているという点だろう。彼女は表現者としての自信と自覚をもちはじめ、その力を振るうことのできる領域では、アイオラは女性にも、そして男性にもなることができる。その力の存在を感じ取ったラティマーが驚きながら発した言葉は、アイオラが言語を力の表出として意識していることをあらわしている——ラティマーの言葉を直訳すれば、彼は、一体どんな風に君のペンで僕を「刺し貫く」(impale) なんだい、と尋ねるのだ。アイオラは、自分は言葉の網の目を織り直し、それによって一つの主体が差異の一方(白人)から他方(黒人)へと移り行く様を表現することができると思う。その時、アイオラはみずからの表現をコントロールして、自分の存在を脅かす社会言語の網の目に対抗しうる力を手に入れているのであり、それはラティマーにもはっきりと意識されるのである。

そしてこの更新可能な自己を表現するために、ハーバーがアイオラに付与した属性が、まじめさという性質であった。現在の読者からみると、彼女は常に

理想主義的で、そしてうんざりするくらいまじめだ。しかしそれによって、彼女は現在にも通じるプラグマティズムの系譜に連なる知識人としての性質を備え、白人社会における自己同一性の幻想を打ち砕き、更新可能な自己をその存在様式の根底に据えた新しい知識人の肖像を打ち立てることごとができていたのではないだろうか。ハーバーは、『アイオラ・リロイ』において、19世紀後半のアメリカで、黒人女性という立場を選びとって生きようとした人物が、まことにまじめに「更新可能な自己」という認識に至るまでの若き知識人の肖像を描き出したのである。

V. 結論

ハーバーはこの小説で、白人と黒人、あるいは男性と女性というカテゴリーとは全く違う二つのカテゴリーを提示している。ハーバーはグレシャム医師とアイオラという二人の人物を対照的に示すことによって、一方には欧米社会が作り上げてきた社会制度のなかで他者を犠牲にした自己満足を目指すことに根本的な疑問を抱かない人々のカテゴリーに属する人物としてグレシャム医師を描き、もう一方では、これまでの人間が作り上げた制度が自己存在をおびやかしていることを自覚し、ローティエが言うように「私達が当たり前のもので疑っていない社会慣行がどれほど私達を残酷にしてきたかを看取る」(how social practices which we have taken for granted have made us cruel)²⁹ ことのできる人物としてアイオラを描き出す。彼女は、自己の存在の不安定さに耐えながら、新しい価値観を作り出そうとする人々のカテゴリーに属する人物なのである。

この対照的な二つのカテゴリーをさらに敷衍させると、人種やジェンダーにとらわれずに、多くのアメリカ文学の登場人物をこれら二つのカテゴリーに分けてみることができるともかもしれない。たとえば、グレシャム医師という人物は、彼なりにアイオラを愛し、限界はあるにしてもアイオラの立場をなんとか理解をしようとしている点を評価することもできるのだが、しかし彼の中にある自己同一性への固執、自己が破滅する過程にいることへの鈍感さ、そして自分の女性への愛が、自己を変えることに結びつかず、むしろ対象の女性を得ること

ができれば自分も希望を取り戻すことができるかのようなフェティッシュな妄執を抱いているという点で、たとえばナボコフの『ロリータ』の語り手ハンバートや、『カラー・パープル』に登場する黒人男性ミスターと同じカテゴリーに属する人間であるといってもいいだろう。それとは対照的に、自分が世界におびやかされる存在であることを自覚しながら、自己と他者のあいだに言語の網の目を新たに編み上げ、自己の不安を制御しつつ、新たな自己のあり方を模索するアイオラを、たとえば『ハックルベリー・フィンの冒険』のハックや、『ライ麦畑でつかまえて』の主人公ホールデン、あるいはトニ・モリスンが『ピラヴド』の中で描き出したセスと同じカテゴリーに属する人間だと認識することで、世界を人種やジェンダーとは全く別の二つのカテゴリーで捉えることを可能にする。そしてハーバーを現代に連なるプラグマティストのひとりとしてみるなら、彼女は、当時の読者に訴えかけるために戦略的に前者に白人という枠組みを当てはめ、そして後者に黒人という枠組みを当てはめ、後者の人間によってこそ、より良い社会ができると語りかけているといえるだろう。

ハーバーは『アイオラ・リロイ』のなかで、自己存在の危機意識から出発して社会改革を目指す主体を描き出した。このような主体をプラグマティズムの系譜に連なるものとして再び指定し直す時、私達はプラグマティズムが本来もっていたもう一つの側面、すなわち、現状の世界が人間存在を本質的に否定する性質をもっており、だからこそ人間は生きながらえるために世界を変革せずにはいられないという論点をあらためて思い出すことになるだろう。それは同時に、エマソンが『アメリカの学者』において、アメリカへの危機感をあらわにして、「すでに悲劇的な結末が生じているのをご覧なさい。この国の精神は、卑しい方向に向かって進むように教えられていて、自分自身を食い尽くしている始末です」(See already the tragic consequence. The mind of this country, taught to aim at low objects, eats upon itself.)³⁰と語っていたという事実を再び思い出すことでもある。ハーバーの感じていた存在への危機感をプラグマティズムの系譜に連ねることで、エマソンの思想もまた、現在の世界に生きる不安を原動力として、人々を戦略的、戦術的な思考と行動へうながすものであったことを、改めて私達は思い出すことができるのではないだろうか。

本稿は、2015年12月12日に九州アメリカ文学学会例会（於：福岡大学）にて口頭発表を行った内容に加筆・修正を施したものである。

¹ ダグボヴィーは、ハーパーが奴隷解放後の再建時代においても、黒人の置かれた状況が奴隷制時代と本質的には変わらないということを強調するために、奴隷制時代と再建時代を結び合わせたとして、“Harper explored various issues in African American history to the Reconstruction era, but her message was especially applicable to the times in which she wrote. She made connections between the period of slavery and the contemporary period for pragmatic, political purposes.” (Dagbovie 245) と論じた。ハーパーの言葉はつねに現実への政治的、実際的な効果を及ぼすために使われており、彼女の言葉の^{プラグマティック}実際的な目的を理解することが、ハーパーの文学作品（詩、短編、小説）においても重要になってくる。

² West 10. 訳は村山訳を参照しながら適宜改変を加えた。

³ James 45.

⁴ ジェームズの『プラグマティズム』によれば、アメリカでチャールズ・サンダース・パース (Charles Sanders Peirce) が1878年に発表した論文「いかにして思考を明晰にしうるか」で、わたしたちの思考が現実に行動の規範になっていることから出発して、思考の役割を発展させるためにはそれに適した行動をしなければならないと考えて「行動こそが我々にとって唯一の意味を持つ」(James 46) と考えたのがプラグマティズムの始まりであった。パースのプラグマティズムの考え方はその後20年ほど埋もれていたが、ジェームズが1898年のカリフォルニア大学の講演で取り上げたことで注目された。パースがプラグマティズムの着想を得た1878年から、ジェームズのカリフォルニア大学の講演までの20年間の間に、「プラグマティズムの考え方を受け入れる素地が出来上がった」(James 46-47) とジェームズは述べるが、その間にはハーパーも各地で多くの講演を行い、盛んに著作活動を行い、1892年には『アイオラ・リロイ』を出版している。19世紀後半において、社会における実際的な効果を求めて講演と著作活動を行ったハーパーも、プラグマティズムの思想を人々が受け入れる素地を作り挙げた人々の一人とあってよいのではないだろうか。

⁵ Rorty, “What is Pragmatism?” 72.

⁶ West 209.

⁷ West 34.

⁸ Said, *Representations of the Intellectual* 94. 訳は大橋訳を参照しながら適宜改変を加えた。

⁹ Eliot 58.

¹⁰ Harper, *A Brighter Coming Day* 52.

¹¹ たとえばハーパーは1857年の講演のなかで、「我々は白人の支配のもと、自分たちがどうすることもできない状況の中に置かれ、嘲笑的となり、圧政のもとに苦しんでいる (Having been placed by a dominant race in circumstances over which we have had no control, we have been the butt of ridicule and the mark of oppression.)」としながらも、自分たちの子供は学校教育によって向上し、また、女性たちも間断のない

労働から得られるわずかな賃金をためて文字を読めるようになるために学んでいるとして、「希望はある (there is hope)」と述べているが、この教育による圧政からの解放という主張は、ハーバーの講演、あるいは著述において何度も強調される論点であった。(Harper, *A Brighter Coming Day* 99-100)

¹² ハーバーは多くの詩の中で黒人の追いつめられた状況を描き出しているが、たとえば「凍える外気の中で」(“Out in the Cold”)と題された詩では、「暗く冷たい外気のなかで取り残された子供が一人／まるで何の守り手もない子羊のように／飢えた狼の吠え声を聞いている／あんなに凍てついた、真つ暗な外気の中で！ (A child left out in the dark and cold, / A lamb nor sheltered in any fold, / Hearing the wolves of hunger bark, / Out in the cold! and out in the dark.)」(Harper, *A Brighter Coming Day* 249) と、凍てついた闇の中で生命の危機にさらされた子供を、抑圧された状況からの救いを求める黒人の暗喩として描いている。

¹³ Harper, *Iola Leroy* 269.

¹⁴ カービーは Beacon 版の *Iola Leroy* に付した序文の中で、“The fictional limitations are evident: Harper represses female sexuality to gain an independent heroine. For although harper could imagine the feminist dream of a ‘woman’s era,’ she was unable to represent a black heroine who was also a sexual being.” (Carby, “Introduction” xxv) と論じ、ハーバーの小説がヒロインの女性が性的な存在でもあることを描けていない点を批判している。

¹⁵ Rorty, *Contingency* 186.

¹⁶ Harper, *Iola Leroy* 271.

¹⁷ Rorty, *Contingency* 12-13.

¹⁸ Harper, *Iola Leroy* 116. アイオラはグresham に向かって、“I believe the time will come when the civilization of the negro will assume a better phase than you Anglo-Saxons possesses.” と述べ、黒人の作り出す文明がアングロ・サクソンが現在有しているよりもより良いものとなるはずだと述べているが、黒人がどのような文明を作り出すかについて、アイオラははっきりと述べることはできない。むしろハーバーは、この小説において、黒人の目指すべき文明のあり方を、グresham とハーバーの対比を通して暗示しようとしているようである。

¹⁹ Harper, *Iola Leroy* 253. アイオラは知識階級に所属する黒人女性として黒人共同体の中で指導的な立場に立ち、「母親の教育」(“Education of Mothers”)と題した論文で黒人全体の社会的地位向上のためには、将来の社会を担う子供たちを育てる母親の教育が不可欠だと論じている。アイオラの主張は作者のハーバーが講演で繰り返し主張した女性への啓蒙の重要性とほとんど重なる。だが、このアイオラの主張においても、教育によって向上した黒人社会の未来図がどのようなものか、はっきりと示されるわけではない。

²⁰ Harper, *Iola Leroy* 112-13. グresham 医師はアイオラに向かって結婚を申し込み、“Iola, my heart is longing to lift those burdens from your life.” と述べるが、この言葉には、アイオラが白人のグresham と結婚することによって白人社会の一員となることが含意されている。そしてこの要求には、グresham はアイオラに黒人の血が流れ

ていることを彼の属している親族や白人社会には告げないことも当然含まれている。アイオラは一瞬にしてグレシャムの求婚とその言葉が意味することを理解し、即座に“Doctor, you know not what you ask. . .”と応じて、自分が奴隷の身分に落とされた経験をもとに黒人社会のために生きる決意をしていることを告げるのである。

²¹ Harper, *Iola Leroy* 114. アイオラはグレシャムに、自分が裕福な白人の娘という立場から一転して黒人の奴隷という立場へと転落した顛末を語りながら、黒人の立場に置かれることによって自分なりの考え方と人生の目標を見つけられ、自分の精神が成熟することができたことを示している。彼女はグレシャムに、そのように変化した「自分自身が私にとっては驚きなのです」(“I am a wonder to myself.”)と告げる。この言葉によって、アイオラは白人の優越に疑問を抱かず、自己の変化を望まないグレシャムの生き方と自分の生き方が全く対照的であることを示している。

²² Harper, *Iola Leroy* 117.

²³ Harper, *Iola Leroy* 144. グレシャム医師が自分の失った片腕について言及する場面は小説の中盤にさしかかった頃に行われる。それまでのグレシャムはむしろ白人の医師として特別な身体的特徴が描かれてこなかっただけに、グレシャム自身が“In the early part of the war I lost my arm by a stray shot, and my armless sleeve is one of the mementos of battle I shall carry with me through life.”と、自分の身体について言及する部分は、読者に強い印象を残す。

²⁴ Said, *Beginnings* 380.

²⁵ Harper, *Iola Leroy* 214.

²⁶ Harper, *Iola Leroy* 214.

²⁷ グレシャムにとって平等とはあくまで黒人が白人化する事であるので、この作品の終盤近くになっても、グレシャムは同僚の白人の医師に向かって、「私は時々、この人種問題の最終的な解決法は黒人を我々の人種に完全に同化させてしまうことだと思うのですよ」(“I sometimes think that the final solution of this question will be the absorption of the negro into our race.”) (Harper, *Iola Leroy* 228) と論ずる。

²⁸ 原文ではラティマーの台詞は“Why, what have I done,” asked Dr. Latimer, in a surprise tone, “that you should impale me on your pen?” (Harper, *Iola Leroy* 263) と記述されている。

²⁹ Rorty, *Contingency* 141.

³⁰ Emerson 70. 訳は齊藤訳を参照しながら適宜改変を加えた。

Works Cited

- Carby, Hazel V. *Reconstruction Womanhood: The Emergence of the Afro-American Women Novelist*. New York: Oxford UP, 1987. Print.
- . “Introduction.” Harper. *Iola Leroy*. ix-xxx. Print.
- Dagbovie, Pero Gaglo. “Black Women Historians from the Late 19th Century to the Dawning of the Civil Rights Movement.” *The Journal of African American History* 89.3 (2004) : 241-61. *Academic Search Complete*. Web. 14 Sep. 2015.

- Eliot, T. S. "Francis Herbert Bradley" *Essays: Ancient and Modern*. New York: Harcourt, 2014. Print.
- Emerson, Ralph Waldo. "The American Scholar." *Essays and Lectures*. New York: Library of America, 1983. 41-71. Print. (「アメリカの学者」『エマソン選集1—自然について』齊藤光訳 東京：日本教文社, 1960年. 115-48.)
- Field, Corinne T. "Frances E.W. Harper and the Politics of Intellectual Maturity." *Toward an Intellectual History of Black Women*. Ed. Mia Bay, et al. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2015. 110-26. Print.
- Harper, Frances E. W. *A Brighter Coming Day: A Frances Ellen Watkins Harper Reader*. Ed. Frances Smith Foster. New York: Feminist P, 1990. Print.
- . *Iola Leroy: or Shadows Uplifted*. 1892. Boston: Beacon P, 1987. Print.
- James, William. *Pragmatism: A New Name for Some Old Ways of Thinking*. 1907. Cambridge: Cambridge UP, 2014. Print.
- Rorty, Richard. *Contingency, Irony, and Solidarity*. Cambridge: Cambridge UP, 1989. Print. (齋藤純一ほか訳『偶然性・アイロニー・連帯—リベラル・ユートピアの可能性』東京：岩波書店, 2015年.)
- Rorty, Richard, Hilary Putnam and James Conant. "What Is Pragmatism?" *Think: Philosophy for Everyone* 3.8 (2004) : 71-88. Print.
- Said, Edward W. *Beginnings: Intention and Method*. 1975. London: Granta, 2012. Print.
- . *Representations of the Intellectual*. 1994. New York: Vintage, 1996. Print. (大橋洋一訳『知識人とは何か』東京：平凡社, 2014年.)
- West, Cornel. *The American Evasion of Philosophy: A Genealogy of Pragmatism*. Madison: U of Wisconsin P, 1989. Print. (村山淳彦ほか訳『哲学を回避するアメリカ知識人—プラグマティズムの系譜』東京：未来社, 2014年.)